

共同体からの疎外が主観的幸福感に及ぼす影響に関する研究

The Impact of alienation from community on subjective well-being*

北川夏樹**・鈴木春菜***・羽鳥剛史****・藤井聡*****

By Natsuki Kitagawa**・Haruna Suzuki***・Tsuyoshi HATORI****・Satoshi FUJII *****

1. 本研究の背景と目的

人が幸せな生活を送るには、一体何が必要なのだろうか。心理学の分野では、幸福を表す尺度の一つとして、人の主観的な幸福感をを用いた研究が進められてきた。主観的幸福感への影響要因についても、数多くの知見が重ねられており、健康状態や収入、レジャー活動への参加や、日々行う移動の快適性など、様々な要素が幸福感に影響しうるものと言われている。そんな中で、家族や地域コミュニティ、組織、国民国家といった様々な集団に対する帰属の有無もまた、主観的幸福感に影響を及ぼす要因の一つと考えられる。

帰属 (belongingness) は人間の基本的で本質的な欲求であるといわれている¹⁾。帰属感の増加は肯定的な感情と、減少は否定的な感情とそれぞれ関係があり、親しい人や社会集団への、安定的で継続的な強い帰属感、喜びや満足感・至福などの肯定的感情を引き起こす傾向がある一方で、帰属感の喪失は不安や苦悩など否定的な感情を引き起こす傾向があるといわれている。

帰属する対象については、これまでの心理学では主として、結婚や親しい人の死、家族、友人関係など個人的な人間関係における親密な存在について多くの研究がなされている。特に、結婚は幸福に最も大きな影響を与える要因の一つであることが知られており、配偶者や子どもなど家族との関係が、幸福尺度や幸福感を構成する種々の感情要因に与える影響について多くの研究がなされている。そして、その家族内の親密な関係や関係に対する満足感が幸福をもたらしうる可能性が示唆されている²⁾。

また、我々は家族以外にも様々な社会集団に属しているが、社会集団からの排斥は不安の要因となり³⁾、社会的な孤独は実質的に高い水準の幸福感とは両立しえないことが指摘されている。例えば、家族以外の主要な社会

集団として、職場や学校に対する帰属感の喪失が、不安や落胆と相関を示すことが知られている⁴⁾。また、居住地域の場所や地域社会・コミュニティに対する愛着や帰属感についても、その欠如が不安や孤独感を引き起こし、高い帰属感が満足感や幸福感に影響を及ぼすことが知られている⁵⁾。地域に対する帰属感、高齢者や専業主婦をはじめ、職場や学校など家族以外に日常的に所属する集団を持つ機会が少ない人々にとって、特に重要な要因であると言える⁶⁾。

この様な他者、あるいは集団に対する帰属感、一面ではその親密さが過度に及ぶとストレス要因になるなどの負の影響も指摘されているものの、上述の通り、一般にそうした帰属感、不安感や苦悩を低減し、満足感などの幸福感を増幅させる傾向があると考えられる。

以上に述べたような、個人の帰属しうる、あるいは、その逆に疎外されうる共同体には、いくつかの階層が考えられる。すなわち、一番身近な共同体である家族から、帰属の実感を伴いつつ共同体意識を持ちうる共同体として最も大きな共同体の一つである国、そしてその中間の階層である地域や、職場組織など、多様な階層の共同体が考えられる。これまでの研究から、それぞれの共同体意識が、主観的な幸福感に影響を及ぼしうるものであることは予期される場所であるが、それぞれの関連の深さは、その階層によって異なる可能性も考えられる。しかし、筆者らの知る限り、それらの相違については実証的に明らかにはされていないものと考えられる。さらに、国という階層に対する共同体意識、すなわち、ナショナリズムと主観的幸福感の関連については、これまで実証的に十分に明らかにされてきていない。

以上の問題意識の下、本研究では、ヘーゲルの理論に基づいて、家族、地域、職場・学校組織、国、という異なる階層の4つの共同体を取り上げ、それらの共同体からの疎外意識が主観的幸福感に及ぼす影響について実証的に検討することとした。この目的の下、既往研究において提案されている「主観的幸福感尺度」と、ヘーゲル『精神現象学』を基に作成した「人間疎外尺度」(藤井・羽鳥, 2009)⁷⁾を用いて、両者の関連性についての仮説を指定し、その仮説を検証した。

なお、こうした分析で得られた知見は、国民の主観的

*キーワード：交通意識分析, 主観的幸福感

**学生員, 京都大学大学院工学研究科

(京都市西京区京都大学桂4, TEL: 075-(383)-3242,

E-mail: kitagawa@trans.kuciv.kyoto-u.ac.jp)

***正員, 工博, 山口大学大学院理工学研究科

****正員, 工博, 東京工業大学大学院理工学研究科

*****正員, 工博, 京都大学大学院工学研究科

な幸福感を加味した国土政策，地域政策，都市政策を考えるための基礎的な知見となり得るものと期待できる。

2. 主観的幸福感と人間疎外

(1) 主観的幸福感の定義と測定尺度

主観的幸福感とは生活への満足感や，暮らしの質への主観的な評価と表現されており，幸せ(happiness)，生活への満足感(life Satisfaction)，ポジティブ感情(positive affect)などの多様な概念を含むものであるとされている⁸⁾。主観的幸福感の構成については，多くの研究において，肯定的な感情(positive affect, PA)と否定的な感情(negative affect, NA)，人生・生活全体への認知的な満足感の三つの要素により構成されるものと捉えられている⁹⁾¹⁰⁾。肯定的な感情と否定的な感情は合わせて Affective SWB(以下，AWB)，人生や生活の全体における認知的な幸福度は Cognitive SWB(CWB)とも呼称されている。また，瞬間的な感情に起因する AWB の積分値は，認知的な主観的幸福感である CWB を規定すると言われている。¹¹⁾

感情的幸福度(AWB)は，うれしい，快いなどの感情に代表される生活の喜び(valence)と，活発さや積極性といった心身の活性化度(activation)の二つの尺度から構成されると言われており，既往研究¹²⁾で構成された valence 尺度の値は人の心拍数に，activation 尺度値は皮膚の動きに有意な関係があることが示されている。

認知的幸福度(CWB)の測定には，SWLS 尺度(Satisfaction with Life Scale,¹⁰⁾¹³⁾が心理学における幸福度の研究では最も頻繁に用いられている¹⁴⁾。SWLS 尺度は暮らしに関する満足感についての 5 つの質問群からなる尺度である。7 件法で回答された値を合計して，尺度値とすることが多い。この尺度を用いた大規模な国際比較調査で得られたデータより，国や文化の違いによって幸福度に差異が現れている他，囚人や未亡人，失職者の尺度値が低い傾向にあることが報告されており¹⁴⁾，犯罪や不幸な出来事の経験が認知的な幸福度を低減させる可能性が示唆されている。

(2) ヘーゲルの『精神現象学』¹⁵⁾と「人間疎外」の概念

ヘーゲルは彼の著書である「精神現象学」の中で，人間疎外の概念について述べている。「精神現象学」では，人間の精神が「意識」「自己意識」「理性」「精神」「宗教」「絶対知」という順に形成，成長していくと論じられており，「精神」の章の中に，「人間疎外」の概念が登場する。

人間精神の成長における「精神」の段階とは，「共同体と個人の意識とが一体化し，個人が共同体の成員となる」段階であるが，この段階に至るには，自己が共同体から外化される状態，つまり疎外を経験する必要がある

とヘーゲルは述べている。疎外を通じて自分自身を共同体から疎遠化することで，「家族」や「国家」等の様々な共同体の存在について認識するようになると考えられている。そして，そうした認識を持った後に，再び精神を共同体と一体化させることにより，共同体への帰属意識を持つようになるのである。

しかし，一度疎外された精神が再び共同体と一体化せずに，どの共同体にも属さないという可能性が考えられる。ヘーゲルによれば，このような状態は「個」として共同体から遊離したままの状態であり，そうした状態に墮すると，人間精神の成長は停滞することとなる。藤井ら⁷⁾は，そうした状態に陥っていることを「人間疎外」と呼称し，『精神現象学』の中から「人間疎外」について記述されている箇所を抽出し，「家族」，「地域」，「組織」，「国家」の 4 つの共同体に関して，それぞれの共同体からの人間疎外尺度を構成している。

3. 本研究の検証課題

第一章でも述べたとおり，共同体への高い帰属意識は肯定的な感情を喚起し，その反対に，低い帰属意識は否定的な感情を引き起こす可能性が示唆されている。これより，共同体への帰属意識を持たない「人間疎外」の状態にある人は，そうでない人に比べて，その共同体について否定的な感情が喚起され易い一方で，肯定的な感情が喚起され難く，そのため感情的幸福度(AWB)がより低い水準にあると考えられる。また，それぞれの共同体に帰属しているという認知は「自分の生活・人生は幸せである」という認知に結びつく可能性があり，この点を踏まえば，「人間疎外」状態にある人は，認知的な幸福度(CWB)がより低い水準にある可能性が考えられる。以上をふまえて，本研究では次のような仮説を措定した。

仮説 1

「家族」，「地域」，「組織」，「国家」のそれぞれの共同体から疎外されている人ほど，感情的幸福度や認知的幸福度が低くなる。

4. 調査の概要

上記の仮説を検証するため，2009 年 11 月～12 月に京都大学の学生 160 名を対象に紙面によるアンケート調査を実施した。質問項目は，日常で感じている主観的幸福度(感情的幸福度，認知的幸福度)および 4 つの共同体からの疎外意識である。感情的幸福度については，既往研究¹²⁾を参考に，生活の喜び(valence)と心身の活性化度(activation)の二つの尺度について測定し，それぞれの尺度値を平均することで算出した。認知的幸福度尺度につ

表1 主観的幸福感の質問項目

感情的幸福感の質問項目
「日々の暮らし」の中で、以下のような形容詞のペアに示す気分や感情を感じる頻度を、5件法(0:全く感じなかった～4:とても頻繁に感じた)で尋ねた。 なお、各形容詞のペアに対し、4段階の感情水準を設定し(例:「うれしいー悲しい」の場合、とてもうれしい気持ち、少しうれしい気持ち、少し悲しい気持ち、とても悲しい気持ち)、それぞれについて頻度を尋ねた。 【生活の喜び】うれしいー悲しい、幸せなー不幸な、快いー不快な 【心身の活性化】積極的なー消極的な、活発なー退屈な、ハッキリした感じー「ぬむたい」感じ
認知的幸福感の質問項目
以下のような5つの項目が「自分の暮らし」にどれくらい当てはまるか、7件法(1:全く当てはまらない～7:良く当てはまる)で尋ねた。 ・ほとんどの面で、「自分の暮らし」は理想に近い。 ・「自分の暮らし」は、とてもすばらしい状態だ。 ・私は「自分の暮らし」に満足している。 ・私は今まで、「自分の暮らし」のために必要とされる重要な事柄を成し遂げてきた。 ・私は、今の「自分の暮らし」の全てを組み替えることができるとしても、ほとんど何も変えないだろう。

表2 人間疎外尺度の質問項目

「人間疎外(家族) 信頼性係数(α)=0.61 ・自分と自分の家族とは一心同体だという感じがする。* ・家族とは、家族の中の一人一人の人間関係の集合にしかすぎないと思う。 ・結婚した人はその新しい家族に自らをなじませるのが当たり前だと思う。* ・もしも自分一人の利益と家族全体の利益が対立したら、どちらを優先しますか。*
「人間疎外(地域) 信頼性係数(α)=0.70 ・自分と自分の住んでいる地域とは一心同体だという感じがする。* ・地域社会とは、地域の中の一人一人の人間関係の集合にしかすぎないと思う。 ・自分は自分の住んでいる地域というものをとても身近なものとして自然に感じる。* ・自分が住んでいる地域に自らをなじませるのは当たり前だと思う。 ・もしも自分一人の利益と自分の住んでいる地域全体の利益が対立したら、どちらを優先しますか。*
「人間疎外(組織) 信頼性係数(α)=0.60 ・自分と自分の属する組織(企業・学校等)とは一心同体だという感じがする。* ・企業や学校等の組織とは、組織の中の一人一人の人間関係の集合にしかすぎないと思う。 ・自分は自分の属する組織(企業・学校等)というものをとても身近なものとして自然に感じる。*
「人間疎外(国家) 信頼性係数(α)=0.67 ・自分と国家は一心同体だという感じがする。* ・国家とは、国家の中の一人一人の人間関係の集合にしかすぎないと思う。 ・自分は国家というものをとても身近なものとして自然に感じる。* ・自分が住んでいる国家のあり方に自らをなじませるのは当たり前だと思う。 ・もしも自分一人の利益と国家全体の利益が対立したら、どちらを優先しますか。*

*逆転項目

いては、SWLS 尺度を、大石¹⁴⁾を参考に和訳して使用した。各幸福感尺度を構成する項目を表1に示す。共同体からの人間疎外尺度については、藤井、羽鳥ら(2009)と同様に、各共同体について、「一心同体感」「無機質的つながり」「身近な共同体意識」「自己断念」「共同体への奉仕」に関わる項目から尺度を構成した。ただし、一部他の尺度項目との相関が低かった項目を除くこととした。これらの尺度の構成項目を表2に示す。

5. 分析

はじめに、それぞれの共同体からの疎外意識と、被験者が生活の中で感じている主観的幸福感との関係について検証するため、これらの尺度間の相関分析を行った。結果を表3に示す。表3に示すとおり、感情的幸福感は家族、国家からの疎外と、認知的幸福感は家族、組織からの疎外と、それぞれ有意な負の相関関係を持つことが確認された。また、感情的幸福感と人間疎外(地域)、人間疎外(組織)、認知的幸福感と人間疎外(国家)の関係に関しては、負の相関が存在する(10%有意の)傾向が見ら

表3 相関分析結果

	主観的幸福感	
	感情的幸福感	認知的幸福感
人間疎外(家族)	-0.259(***)	-0.228(***)
人間疎外(地域)	-0.133(*)	-0.08
人間疎外(組織)	-0.152(*)	-0.215(***)
人間疎外(国家)	-0.190(**)	-0.148(*)

*** p<0.01 **p<0.05 *p<0.10 (表中の数字は相関関数)

表4 重回帰分析結果

	感情的幸福感(n=159)			
	B	β	t	p
定数	8.354		4.667	0.000
人間疎外(家族)	-1.045	-0.246 ***	-2.943	0.004
人間疎外(地域)	0.306	0.078	0.785	0.433
人間疎外(組織)	-0.232	-0.057	-0.678	0.499
人間疎外(国家)	-0.768	-0.192 **	-2.069	0.040
R	0.314			
R ²	0.099			

(B:非標準化係数, β :標準化係数, t:t値, p:有意確率)

*** p<0.01 ** p<0.05 *p<0.10

表5 重回帰分析結果

	認知的幸福感(n=160)			
	B	β	t	p
定数	27.026		10.143	0.000
人間疎外(家族)	-1.313	-0.207 **	-2.476	0.014
人間疎外(地域)	0.814	0.139	0.398	0.164
人間疎外(組織)	-0.982	-0.161 *	-1.919	0.057
人間疎外(国家)	-0.968	-0.163 *	-1.754	0.081
R	0.308			
R ²	0.095			

*** p<0.01 ** p<0.05 *p<0.10

れた。これらの結果は、共同体からの疎外意識と主観的幸福感との間に負の相関関係がある可能性を示唆する結果であるといえよう。

なお、人間疎外(地域)と認知的幸福感との間には、有意な関係を示唆するデータは得られなかった。この結果には、今回の被験者が学生であり、全体の78%が一人暮らしをしていること等が起因しているのかもしれない。アパート住まいなどで近隣住民との触れあいが少なく、「地域」という共同体が身近に存在していないことが影響している可能性が考えられる。

以上のように、より幅広いサンプル層からデータを収集すべきという課題は残るものの、各共同体での人間疎外尺度の値が高いほど、感情的幸福感および認知的幸福感が低減する傾向を示唆するような結果が得られたと考えられ、この結果は本研究で掲定した仮説1を支持するものと考えられる。

続いて、各共同体からの人間疎外が、主観的幸福感に及ぼす影響についてさらに詳しく検証するため、主観的幸福感を従属変数、4つの共同体からの人間疎外尺度を独立変数とした、重回帰分析を行った。その結果を表4、5に示す。

表4、5に示すとおり、家族からの疎外意識は感情的

幸福感と認知的幸福感の両方に、国家からの人間疎外は感情的幸福感に、それぞれ有意な負の影響を及ぼす可能性が示唆された。また、組織と国家からの人間疎外がそれぞれ、認知的幸福感に負の影響を及ぼしている(10%有意)傾向が見られた。地域からの人間疎外に関しては有意な影響が見られなかった。また、 R^2 については、いずれにしても、おおよそ、0.1程度であった。既往研究より、主観的幸福感の分散の半分程度が、個人的特性で説明されるという事が知られているが¹⁶⁾、この結果は、それらの内おおよそ五分の一程度が、人間疎外、あるいは、共同体精神の強弱によって説明可能であるということを示している。

以上のように、家族、組織、国家の各共同体からの疎外が主観的幸福感に直接的な負の影響を及ぼしていること、言い替えると、それらについての共同体意識が認知機、感情的な主観的幸福感に正の影響を及ぼしていることが示された。

6. 本研究のまとめ

かねてより、他人との関わりの深さや共同体に帰属しているという意識は、人の幸福感に影響を及ぼすという可能性が指摘されてきた。また、家族や国家といった共同体の階層の違いにより、共同体への親近感や関わりの深さに差異が生じ、それぞれへの帰属意識が幸福感に及ぼす影響の大きさが異なることが予測された。

そこで本研究では、共同体への帰属意識を表す一つの要素である、ヘーゲルの人間疎外概念と、人の主観的幸福感との関係について明らかにし、共同体という観点から人々の幸福感を増進するような、各種政策の一助となりうる知見を得ることを目的とした。検証課題に関しては、共同体からの疎外意識が人の主観的幸福感に負の影響を及ぼすという仮説を推定した。

仮説検証の結果、各共同体から疎外されているという意識を持つことで、その人の主観的幸福感は低くなる傾向が示唆された。また、家族、組織、国家の3階層の共同体からの疎外感が、主観的幸福感に直接的な負の影響を及ぼす可能性が示された。共同体への帰属意識を喪失した「人間疎外」の状態が、幸福感低減の一要因であり、逆に、それらへの共同体精神を持つことが幸福感を向上せしめる要因となることを示す結果といえる。

本研究では、共同体への帰属意識の有無が、人の主観的幸福感に影響を持つことを支持する知見が得られた。このことは、地域社会の復興や各種コミュニティの再建、ナショナリズムの適正化等の施策を通じた共同体精神の増進することは、人々の幸福な暮らしに寄与しうることから、そうした方向の帰結をもたらす様々な土木計画、都市・地域計画、国土計画行為は、人々の幸福の恒常の

実現にも資するものであると考えられる。

参考文献

- 1).Baumeister, R., F. and Leary, M.R (1995) : The need to belong: desire for interpersonal attachments as a fundamental human motivation, *Psychological Bulletin*, vol.117, No.3, pp.497-529,
- 2).Myers, D, G.: Close relationships and quality of life, In Kahneman, D., Eienner, E. and Schwarz, N.(Eds), *Well-being: The foundations of hedonic psychology*, 1999
- 3).Diener, M. L. & McGavran, M. B. (2008). What makes people happy? A developmental approach to the literature on family relationships and well-being. In R. Larsen & M. Eid (Eds.), *The Science of Subjective Well-Being*. New York, NY: Guildford Press.
- 4). Barden. R. C., Garber, J., Leiman, B., Ford, M. E., & Masters, J. C. (1985). Factors governing the effective remediation of negative affect and its cognitive and behavioral consequences. *Journal of Personality and Social Psychology*, 49, 1040-1053.
- 5).Harris, P. B., Werner, C. M., Brown, B. B., & Ingebritsen, D. (1995).Relocation and privacy regulation: A cross-cultural analysis,*Journal of Environmental Psychology*, 15, 311-320.
- 6). Altman, I. and Low, S.: Place attachment, NewYork:Plenum, 1992.
- 7). 渡邊望, 羽鳥剛史, 藤井聡, 竹村和久 : 近代大衆社会における人間疎外と大衆性についての実証的研究, 土木計画学研究・講演集, Vol.40, 2009.
- 8).Diener, E., Subjective well-being: *Psychological Bulletin*, 95/3(1984), American Psychological Association
- 9). Andrews, F. M., & Withey, S. B.(1976). *Social indicator of well-being: America's perception of life quality*. New York: Plenum.
- 10). Diener, E., Emmons, R.A, Larsen, R.J, Griffin, S(1985). The Satisfaction With Life Scale. *Journal of Personality Assessment*, 1985,49,1
- 11). D. Kahneman, E. Diener and N. Schwarz, eds.(2003): *Well-Being: The Foundations of Hedonic Psychology*, New York: Russell-Sage
- 12). Västfjäll, D., Gärling, T. (2007). Development and Aging: Validation of a Swedish short self-report measure of core affect, *Scandinavian Journal of Psychology*, 48, 233-238
- 13). Pavot, W., & Diener, E., (1993). Review of the

satisfaction with life scale. *Psychological Assessment*, 5, 164–172.

- 14). 大石繁宏, (2009), 幸せを科学する 新曜社
- 15). ゲオルク・ヴィルヘルム・フリードリヒ・ヘーゲル: 精神現象学(1807) , (長谷川宏 訳), 作品社, 1998.
- 16) Lyubomirsky, S., Sheldon, K.M., Schkade, D. (2005). Pursuing Happiness: The Architecture of Sustainable Change. *Review of General Psychology*, Vol. 9, 111-131